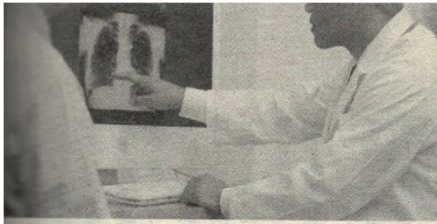


PART 6

病院で拾う病原菌、ウイルス「どこまで恐れるべきか？」
**院内感染のリスクを考えると
 本当に、病院には行かないほうがいいのか**

「感染防止対策加算」という制度があります。同制度で最上位のクラス1に認定された病院は、専従の院内感染管理者が配置されるなど、対策の行き届いた医療機関であることを証明しています。各病院のホームページで開示されている情報なので確認してみてください」（同前）

「病院に行くから病気になるんです」との見出しで『週刊現代』が危険を訴えたのが、「院内感染」の問題である（7月16日号）。病院内で病原菌、ウイルスが発生し、抵抗力が落ちた入院患者を中心に、院内に出入りするすべての人が感染し得るというもので、記事では10年に帝京大学医学部附属病院で患者35人が死亡した院内感染の事件がクローズアップされている。院内で数種類の抗生物質に耐性を持つ「薬が効かない不死身の菌」多剤耐性菌が発生したことが原因だという。



最近でも、

11月に久留米大病院で同じく多剤耐性菌による院内感染が発生し、1人が死亡したばかり。「院内感染が怖いから病院に行きたくない」と考える人が増えてもおかしくない。

しかし、この選択は本当に正しいと言えるのだろうか。大阪医科大学附属病院・感染対策室室長の浮村聡氏はこう指摘する。「多剤耐性菌は、病院内に

限らず、介護を受けている人や病気でない人も保持していたり、街中など日常の空間にも存在します。だから病院に近づかなければ耐性菌のリスクから逃れられると考えるのは間違いです。ある程度の免疫力がある人なら、多剤耐性菌に触れても病気を引き起こすことはない。病院を遠ざけることで、逆に体の不調のサインを見逃すリスクのほうが大

きいと思います」ただし、その記事でも触れているとおり、高齢者や抗がん剤による治療を受けている患者など、免疫力が著しく落ちている場合は、耐性菌が危険な存在になることは間違いがない。そのため重要なのは院内感染が起きにくい病院を選ぶことである。「院内の感染防止対策の評価を国が行ない、充実して

いれば診療報酬を上げる『感染防止対策加算』という制度があります。同制度で最上位のクラス1に認定された病院は、専従の院内感染管理者が配置されるなど、対策の行き届いた医療機関であることを証明しています。各病院のホームページで開示されている情報なので確認してみてください」（同前）

ほかに、菌が沈着する床の清潔さや、医師や看護師の手袋交換、アルコール消毒の頻度なども確認すべきポイントだという。そうした対策を病院が怠ると、「病院に行くから病気になる」という最悪の事態を招く。